
ヴァンパイア皇子の侍女

すももっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァンパイア皇子の侍女

【Nコード】

N7660X

【作者名】

すももっち

【あらすじ】

美形家族から突然人並みの顔立ちで産まれたアマリリスは、ひよんなことからヴァンパイア皇子であるラミナス様の侍女になることになった。甘いフェイスには慣れっこだったはずのアマリリスだったが、なぜだかラミナス様には翻弄されっぱなし。淡々とただ仕事をこなしたいだけに、どうしても邪魔ばかりしてくるの！？

1・物語の概要を説明しましょう

昔々のこと、ある大きくてとても平和な国がありました。

その国はヴァンパイアが皇帝となつて納める、ヴィルギナール帝国といいました。

その13代目のヴァンパイア皇帝になられたのがラミナス様です。ヴァンパイアであるが故に、それはそれは大層な美貌の持ち主であらせられ、市井では吟遊詩人が詩にするほどでありました。

しかし、大層な美貌であるために、問題も後をたちませんでした。

さて、この物語の主人公は、カルノリア家の5人兄弟の4番目の女の子です。

上の3人の兄たちと下の弟も漏れることなく美形に産まれたのですが、なぜだか彼女は美形と呼ぶには物足りない、世間一般の人並みの顔立ちでこの世に生を受けました。

兄たちも弟も二人の両親も、誰もが認める美形家族であるのに、なぜ自分だけ違うのか……。

彼女は人知れず悩みました。

そして彼女はその誰にぶつけることも出来ない悩みを、勉強や仕事に向けるようになるのです。

御年15歳で領主の元へ侍女として働きに出るようになり、それも早2年が経とうとしているところから物語は始まります。

さてさて、美形家族に囲まれて生きる彼女は、どうなっていくのでしょうか？

1・物語の概要を説明しよう（後書き）

いろいろ中途半端ですが、新連載を始めさせていただきました。
この物語は甘いくあまーく育てていきたいと思っています。
一人でも多くの方に楽しんでいただけますように。

お読みいただき、ありがとうございました。

2・侍女はこうして侍女になるのです

なんで突然こんなところに……。

私はいつものように朝の身支度をして、領主カーター家へと向かうと家を出ようとした時だ。

「あ、アリス、ちょっと待って」

私の愛称で私を呼び止めたのは、一番上の兄だった。

ヴィルギナル城で官吏をしているメルダ兄さんがこの時間まで家にいることは、なかなか珍しいことだ。

ただそのことに関しては深く考えなかった。

「今日は一緒に城に行くよ。カーター家にはもう話は通っているから」

につこり微笑みながら、相変わらず突拍子もないことを言う。

ただ産まれてからずっとこの兄を見続けていたのだから、さすがに慣れというものも生まれる。

慣らざる得なかったとも言える。

だから私は渋い顔をメルダ兄さんに向けるだけで止めることができた。

「意味がわからないんだけど……」

「行けばわかるから」

そして今に至る。

私の目の前にいるのは、城の人事についての最高責任者（城の官職のことはよく知らないが）のザスティン様だ。

この時点でなんだかすごくイヤな予感がする。
良い知らせではないことは明らかだ。

ザステイン様はさうと自己紹介をして、早速だが、と言ってすぐに本題に入った。

まだ戸惑いを隠せない私の横に座るメルダ兄さんは、相変わらずにここにこと微笑みながら黙っている。

ただ横にいてだけで、なんの頼りにもならないじゃない……。

「ラミナス様の噂を聞いたことはあるかな？」

国の一角の領主の家で侍女をしている私が、ラミナス様のことを多く知っているはずはない。

しかしラミナス皇子のことは否応なしに耳に入ってきていた。

なんでも、見境なしに女性と名のつくものは、その美貌という毒牙にかけるとかなんとか……。

その類いの噂は何度となく侍女の間で聞いたことがある。

「単刀直入に言おう。君にラミナス様付きの侍女になってもらいたい」

咄嗟に不満の声が出そうだった。

なぜ自ら獣の元へ行かなければならないのか……。

これでは飛んで火に入る夏の虫。

そんな妹の危機にも関わらず、メルダ兄さんは微笑んだまま黙り続けている。

「……なぜですか？」

唸り声のような低い声が出た。

普通であれば城で働くことは、とても名誉なことである。

それよりも、妹が危険に晒されそうな時にニコニコしている薄情なメルダ兄さんに怒りを覚えた。

その私の鋭い視線に気付いた様子のザステイン様は、少しだけ柔らかい表情を作った。

硬い顔の印象を与えるだけに、少しの表情の変化でだいぶ人に与える印象が変わる人だと思った。

「いや、彼から君のことを聞いたのだよ」

「メルダ兄さんから……？」

益々怒りが沸いてくる。

「君が聞いた噂がどのようなものかは分からないが、ラミナス様はその……、かなりの美貌の持ち主だ」

そんなこと、この国の人間でなくても知っている、というほど当たり前なことだ。

それはラミナス皇子が産まれた時から分かりきっていたことではないか。

「それ故にほとんどの侍女がラミナス様の美貌に敵わず……」

ザステイン様はそこで言葉を切り、顔を曇らせた。

やはり誘惑ではないか……。

「ラミナス様も来るもの拒まず去るもの追わず、な性格だしね」

「それがまた厄介なんだがね……」

クスクスと笑みを溢しながらメルダ兄さんが言った。

それにザステイン様が頭を抱えるようにして深いため息を落とした。

「来るもの……？」

自分から誘っているのでは？

何がなんだかわからなくなってきた。

「そう。そしていろんな人を侍女に付けてみたんだが……。今は二人の侍女を付けているが、年齢も年齢なので、体力的に大変なようですね。やはり若い人の手が必要なのだよ」

「……………」

「そんな時に彼から君の話聞いたんだよ」

ザステイン様が哀れに見えて返す言葉もない。

それにしたって、いったい何を話したんだ、この兄は……。

「なんでも君は実に働き者で、頭も良く、そしてなんとと言っても……、美貌に惑わされることのない精神力……！」

「……………」

今度は別の意味で言葉を失った。

それは精神力が強いのではなく、産まれた環境によるものだろう。

産まれた時から上からも下からも美形家族の中に身を置いているのだ。

家族の私でさえも躊躇することなく、私以外の兄弟は美形であると宣言できる。

これは決して自慢ではない、真実なのだ。

そのことを受け入れなければ、あの生活などやっていられない。

私だって生真面目な性格と言われるが、普通の女の子だ。

それなりに悩んだ数も人知れずある。

しかし悩んでも解決できることではない。

もうこの顔で産まれてしまったのだ。

そんな悩みを繰り返していたら、歳を重ねていくにつれ、悩んでいることが馬鹿馬鹿しくなった。

完全に吹っ切ったのである。

兄たちのおかげで目の越えてしまった私が、こんなことに役に立つとは思わなかった。

「どうか、頼めないだろうか」

本当は断りたかった。

噂で人を判断したくはないが、火のないところに煙はたたない。

つまり、ラミナス皇子にもなんらかの原因を作る要素を持っているのだと思う。

しかしイヤと言えばメルダ兄さんはどうなる？

メルダ兄さんだけではない。

同じく城で騎士をしているアラク兄さんやアレク兄さんにも泥を塗るようになるのではないか？

城で働く3人の兄さんにとって、私は断れる立場にあるのだろうか？考え始めたら最後、もう断ることはできなかった。

家に帰るまでの馬車の中で、私と向かい合ったメルダ兄さんは、突然クスクスと笑いだした。

その理由がどう考えても先のことに決まっているので、私は冷めた目線をメルダ兄さんに向けた。

そんなメルダ兄さんにも慣れているし、逆を言えばそんな私にもメ

ルダ兄さんは慣れている。

お互い様なため、お互い特に気にする反応ではない。

「……なに」

「まさかアリスがあんなあっさり引き受けるとは思わなくてね。最悪断るかと思つてたぐらいだし」

誰のために引き受けたと思つてるのだ、まったく……。

と口に出せないあたり、私はまだまだお人好しというところだろうか。

代わりに小さく笑顔を携えてメルダ兄さんを見た。

「城で、しかも皇子に仕えられるなんて、名誉なことじゃありませんか」

「そうだね。確かにその通りだよ。だけど、アリスは自分の名誉のために体を張るような性格じゃないだろう？」

「……………」

私の作り笑顔などピシヤリと撥ね付けて、自分は更に笑顔を濃くした。

伊達に17年間、私の兄をやつてなかったということか。

あまりの凶星に恨めしそうに黙っていると、メルダ兄さんはまたクスクスと笑った。

「まあ理由は何にせよ、アリスにとって損になることはないと思うよ」

「どうして？」

「なんとなく、かな。そんな気がするんだ」

なんとも心許ない返答。

私は呆れにも似た思いでため息を吐き出した。
そんな私の失礼な態度にも動じることはなく、メルダ兄さんが笑顔を崩すことはなかった。

「何はともあれ、頑張るんだよ。アマリリス」

愛称でない私の名を呼びながら、メルダ兄さんは私の肩をぽんと叩いた。

真剣に私のことを想っているのだろうが、どうも他人事のようにも感じられて、私はまた深く息を吐き出したのだった。

3・挨拶をしましょう

「アマリリス・カルノリアと申します。新しくラミナス様付きの侍女として働かせていただきますので、よろしくお願い致します」

ラミナス様の私室に足を踏み入れての第一声はそれだった。

ラミナス様は特に興味がなさそうに、あるいは眠たそうに、あくびをしながら「あ、そーなの？」と言いたげに私をチラリと見た。

私に向けられた視線は本当に一瞬で、次の瞬間には手を広げておもいきり伸びをしている。

まだ天窓付きのベッドの中にいるのだし、起床してすぐだということも分かるが、いくらなんでも興味がなさすぎではないか？

まあ、変に持たれるよりはマシなんだけど……。

ラミナス様を生で初めて見たが、噂に違わぬ美貌の持ち主だと思った。

毎日あの美形な兄弟に囲まれている私でさえ、目を見張るものがある。

金髪の短めの髪、切れ長の深紅の瞳、高い身長、逞しい肢体。

どれを取っても誰にも曳けをとらない美しさがある。

また美しいだけでなく、オーラがあるのだ。

現に伸びをするたったそれだけの動きも、洗練されているような、とても画になる姿である。

貴婦人なんかは、それだけで熱い吐息を漏らしてしまうのだろう。

もちろん私も吐息ぐらいは漏らしそうではあったが、ザスティン様のあの懇願があつての現在の立場だ。

綺麗だ何だと言っている場合ではないのが現状で。

私は手早く朝の身支度に取りかかった。

王室でも領主の家でも結局やることは同じだ。

「随分手際がいいんだな……」

感心しているんだか呆れているんだか、どちらとも取れるような口調でラミナス様は小さく呟いた。

未だベッドから出てこようとしない主を横目に、私はワゴンから湯の入った洗面器を手を取った。

「お褒めに預かり光栄です」

自分の口からあまりにも感情の籠らない言葉が出てきて、言った自分でも驚いた。

改めて自分は正直な人間なのだと自覚する。

洗面器をベッドの中にいるラミナス様の膝の上に乗せると、ラミナス様は窺うように私を見つめた。

「名前、なんだっけ？」

「アマリリスと申します、ラミナス様」

「ふーん……」

アマリリスなど、あまり何度も名乗りたくない名前である。

美人であれば何の問題もなかった。

父親も母親も、他の兄弟と同じように私が美形になると信じていたから、アマリリスなどと名付けられたのだ。

成長してみれば、なぜだか娘だけが名前負けの子供になってしまったわけだが……。

と、次の瞬間、かなりの至近距離に美貌と詠われるラミナス様の顔が現れた。

奇声を上げるところを寸で抑え、少しだけ後ずさる。

ラミナス様は怪訝そうな顔をこちらに向けていた。

「なんかさ、態度悪くない？」

ドキリというよりも、ギクリという効果音がどこからか聞こえてきそうだった。

ズバリ、凶星である。

当然、頼まれたとはいえ嫌々引き受けた仕事を、ハツラツとこなせるわけがない。

だからと言って皇子にこのような態度は、流石に不味かった……。すみません、と口に出そうとラミナス様を改めて見ると、いつの間にか地に足を付けてこちらを見つめている。

心なしか先ほどからお顔が近い気がするのですが……？

「俺のことキライなの？」

「そ、そんなことは……」

ない、とはいいい切らないあたり、本当に自分は素直な性格である。キライというよりも、好きかキライかもわからない。

それほどラミナス様に興味を持ったことがなかったし、持つきつかけもなかった。

まさかこのような形でお近づきになるとは、皆目見当もつかなかったが……。

「なるほど。ザステインも考えたな」

ラミナス様は顎に手をやり、ニヤリと口の端を持ち上げた。

とても美しいと思うが、美しいだけにニヒルさは普通よりも倍はある。

「元々俺のことがキライな人間なら、俺を誘惑することはないって

ことか。と言つても、」

その赤い瞳が私を捕らえ、鋭く射ぬかれた感覚に襲われる。
ゾクリと背に冷たいものを感じた。

「俺は受け身なわけじゃないんだけどな」

身の危険を全身で感じたのは、恐らく気のせいではなかったと思う。
ああ……、やはり自分は間違えてしまったのかもしれない。
兄たちのために体を張るだなんて……。

今更ながらに引き受けたことを後悔している私は、いったいこれからどうなってしまうのだろうか……。

3・挨拶をしましょう（後書き）

早くも多くの方に読んでいただけているようで、とても嬉しいです。なんとか皆様の期待している楽しいと思えるような物語にしていきたい、頑張っていきたいと思います。

さて、今回やっとラミナス様を登場させることができました。いったいどんなことをしてくれるんでしょうね？

お読みいただき、ありがとうございました。

4・紅茶をお淹れいたします

ヴァンパイアといっても、実際は人間とそう変わりはない。ラミナス様が国王に即位すればヴァンパイアの13代目の王様になる。

その間にヴァンパイア皇子は夜型から朝型の生活へと切り替えることに成功しているし、少量の血液さえ接種すれば、太陽の光だって怖くはない。

まだヴァンパイアと人間が共に生活していない時代、ヴァンパイアは魔族と呼ばれていたらしい。

その時は太陽の光を閉ざし、寂れた暗い城で、少しの従者とヴァンパイアは暮らしていたらしい。

それがなぜヴァンパイアが王様となる国が出来上がったのか、私や一般の貴族や平民は知らないが、ヴァンパイア王のおかげでこの国は豊かで平和な国であることは確かだ。

とにかく私が言いたいのは、ヴァンパイア皇子も蓋を開ければただの人と変わらないのだ。

現在ラミナス様付きの侍女は、私以外に二人いる。

その二人はザステイン様の言葉通り、60代の足腰が弱り始めた頃の地方の貴族の方だった。

二人は口々に「やっと楽になるわぁ」「もう隠居しても大丈夫ね」などと言っていたが、すでに休みがちなところを見ると、どうやら本気で引退を考えているらしい。

つまり、いつの間にかラミナス様付きの侍女は私一人のようなものになっていたのだ。

まだ働き初めて3日しか経っていないというのに。

ガタンという音と共に、ラミナス様の私室の扉が開いた。

先ほどまで会議が行われていたということで、ラミナス様は手に書類の束を持ち、私室へとご帰宅された。

この時間に私室に帰ってくるなどありえない。

職務室があるだろう、職務室が。

私はベッドサイドの散らばった本を片付けていたところで、突然の主の帰室に驚きつつも、しっかりと腰を折って礼をした。

「お帰りなさいませ、ラミナス様」

ラミナス様は真っ直ぐに部屋のソファーに向かい、持っていた書類と共にどさりと音をたてて座った。

優雅に足を組み、その状態で私を見据える。

「茶を用意してくれないか？そうだな……、今日はベルガモットティーがいいな」

突然帰ってきたと思えば、次の瞬間にはこんなことを言う。

何を考えているのかさっぱり分からない。

私の仕事の邪魔をして、私に嫌われないのだろうか？

そうする理由が思い付かないが……。

また何故だかニコニコと笑顔で言ってくるものだから、侍女としては文句も言えないので素直に従う他ない。

これぞ笑顔の無駄使いだと思う。

「承知しました」

と、私がラミナス様の私室を出て戻ってくる間、約10分。

ほんの少しの時間かと思いきや、皆さんに想像していただきたい。

朝の急いでいる時の10分がどれだけ大切か、人生に一度は誰もが必ず経験して理解していると思う。

ラミナス様付きの侍女はそれに近い感覚が毎日だと考えていただければ、恐らく分かりやすい。

言い訳ではないが、侍女はほぼ私一人なのだ。

朝の身支度も、朝食の準備も、朝食後のティータイムも、私室の部屋の掃除も……。

言い出したりきりがない。

17歳にして、自分よりも年上の子供を持ったといえど主婦には理解していただけるだろう。

いや、あんな態度がでかくて、計算高い人の世話なんかと比べれば子供の方が何倍もマシだ。

しかしその10分間に、いったい何があったのか。

私室は藻抜けの殻ではないか。

「ラミナス様より『急な仕事が入った。茶は職務室まで持ってきてくれ』とのことです」

「……そうですか」

先にも述べた通り、ほんの10分の時間も今の私には大切なのだ。今から職務室へ行って茶を蒸かしていたら、約30分のロス。

ああ！もう！

キライになりそう！

あの美しい顔も、今は想像するだけで憎らしく感じた。

とりあえず、そのことを伝えてくれた部屋門番の男性（少し憐れんでいるように見える）に礼を述べ、足早にラミナス様の職務室へと向かった。

これでいなかったら、本気で怒ってやる。

果たしてラミナス様は、優雅にそこにいらつしやった。

私が職務室に入るなり「悪かったね」と満面の笑みを携えて言った。そんな笑顔で私を誤魔化せるとお思いなの？

私はカルノリア家の長女なんですからね。

「ラミナスの新しい侍女か」

最悪なことに、ラミナス様の職務室にはラミナス様一人ではなかった。

こちらもかなり有名な方だ。

騎士団団長、ルイセアス。

剣の実力も去ることながら、人望も厚く、軍配能力も抜きん出ているとか。

二人の兄が騎士団所属であるため、そこから騎士団の噂はそれとなく私の耳にも届いていた。

ただそれだけでなく、ラミナス様同様、女遊びが激しいということでも有名だ。

騎士団というだけで女性方から注目の的であるのに、さらにこの大きな身体とそれに見合ったサバけた性格が彼を引き立たせている。実際こうして並んでいるのだから、類は友を呼ぶということか。

ラミナス様に続いて、関わりたくない人第二位に位置付けられているのに。

「アマリリス・カルノリアと申します」

しかし挨拶をしないわけにもいかないのだ、当たり前だけでも。

私が名乗ると、ルイセアス様は「カルノリア？」と目をパチパチさせた。

ソファアーに向かい合うように座っていたラミナス様が、そんなルイセアス様を不思議そうに見つめる。

「知ってるのか？」

「団員にカルノリア家の男が二人いるからな。結構腕も立つし、顔

立ちもいいし。確かに妹がいるって話も、そいつらから聞いた」

顔立ちがいいのは必要な情報なのか？

密かにルイセアス様を睨んでいると、ふとラミナス様がこちらを見ていることに気が付いた。

まじまじ見ているような、少し伺っているような……。

戸惑って見つめ返していると、ラミナス様はその表情のまま口を開いた。

「兄たちが騎士、ねえ」

それがなんだと言うのだ。

「あともう一人兄がいただろ？ええと……」

「……メルダ・カルノリアのことでしょうか」

「そうだそうだ。確か官吏職だよな」

また余計なことを……。

私の兄弟構成を、なぜ今この場で紹介しなければならないの！

「メルダ？」

「ああ、ラミナスは会ったことぐらいあるんじゃないか？ザステインの補佐官やつてる奴なんだし」

「やつぱりあのメルダの妹ってことか。ふうーん、メルダのねえ」

だからなんなの！

顔も性格も似ていないのは重々承知している。

だから不思議そうに私を見つめる目線にも、残酷だが慣れてしまっている。

だからって、そんなあからさまにじろじろ見なくたっていいじゃない

い？

「どうりで肝が据わってると思ったんだ」

「は？」

思わずすつとんきょうな声を出してしまい、はつと口を押さえる。

その私の反応になのか、ただその現実が面白かったのか、ラミナス様はニヤリと口の端を持ち上げた。

私はもうよく分かってる。

この顔をした後のラミナス様の言葉は、私にとっては何も嬉しくないことを言うのだということ。

「俺は君を落とすことに決めた、アマリリス」

ルイセアス様はきょとした後、腹を抱えて盛大に笑った。

私はラミナス様の挑戦的な深紅の目を受けとめながら、ドキドキするどころかうんざりしていた。

どこの流れでその結論に至ったのか、まずその頭を覗いてみたい。

せつかく持ってきたベルガモットティーは完全に冷めきってしまい、新たに淹れてくるしかなくて、ロスタイムは一時間にまで延びてしまったのだった。

4・紅茶をお淹れいたします（後書き）

今回もお読みいただき、ありがとうございました。

淡々とルイセアス様が登場しています。

今後いろいろと動いてくれると嬉しいんですけどねえ……。

次回は二番目、三番目の兄が登場します。

どんどん新しいキャラクターが出てしまつて申し訳ないですが、どうぞよろしく願います。

5・やはり皇子様はヴァンパイアでした

騎士として城に住み込みで働いている兄たちが久しぶりに帰ってきた。

アラク兄さんは無表情に、アレク兄さんはニヤニヤしながら、二人とも帰宅直後に私を見つめた。

「……お帰りなさい、アレク兄さん、アラク兄さん」

何を言いたいのか、おおよその見当はついてる。

しかし私としては触れられたくない話ナンバーワンだ。
特にアレク兄さんには面白がられるに違いない。

カルノリア家の二番目と三番目の兄は一卵性の双子だ。

顔は本当に瓜二つで、黙っていたら普通には区別はつかないのではと思うほど二人は似ている。

しかし見た目と性格は必ずしも比例して似るとは限らない。

先に産まれたアラク兄さんは、物静かで、冷静沈着、それでいて面倒見がいい。

あまり表情が変わらないので人に怖い印象を与えるのが玉に傷だが、それさえ乗り気ってしまえば本当にいい人だと言えるはずだ。

アラク兄さんより3分あとに産まれたアレク兄さんは、面白いこと大好き、やんちゃやり放題、トラブルメーカー。

それでも何をしても憎めないのは、アレク兄さんが人懐っこくて本当は優しいのだということを皆が知っているからだ。

顔も良くて性格もいいなんて、顔も性格も並みの私からしたら、ただズルいとか言いようがない。

太刀打ちどころか、同じ土俵にも立てないと思う。

「アリス、ラミナス様の侍女になっただってなあ」

そら来た！

だから嫌なんだ……。

アレク兄さんはずいっと私に歩み寄り、ニヤニヤと笑みを携えながら言った。

近付かれた分十分に離れると、アレク兄さんは少し不満そうに頬を膨らませた。

いくつだ！

「なっただけど？それがなに？」

「それがなに？じゃねえだろお、なあ！？大問題じゃん！あの！ラミナス皇子だよ！？」

「何よ。別に普通でしょ？皇子の侍女なんて名誉なことじゃない」

「そうだよなあ。名誉なことだよなあ。尊敬するなあ。あのラミナス皇子だもんなあ。あの！ラミナス皇子……」

「だから何よ！？」

私が声を荒げると、それを待ってましたと言わんばかりにアレク兄さんはまた笑いだした。

ムツとして睨み付けるが、アレク兄さんはどこ吹く風。

そんなアレク兄さんをアラク兄さんが首根っこを掴み、ぐいっと後方に引っ張った。

アレク兄さんは「ぐえっ」と苦しそうな声を上げたが、アラク兄さんはやはり無表情のままだ。

「大丈夫なのか？」

たった一言なのに、その一言にすべてが詰まっている。

アラク兄さんの問い掛けは逃げ場を与えてくれないので困る。

いつの間にかアレク兄さんもアラク兄さんの後ろで真剣な顔をこちらに向けていた。

邸の玄関でなんて話をしているんだ……。

何だかんだで妹の心配をしてくれるこの双子の兄たちを、やはり優しいのだと思う。

「大丈夫。特に何事もなく淡々と仕事できてるしね」

嘘をついてない……、とは言えない。

でもここで兄さんたちに昨日の話をしてどうかなる？

「君を落とすことに決めた」なんて言われただなんて、恥ずかしくてとても人には言えないじゃない。

……君を落とす……。

と、とんでもないことを言われたんじゃないか……？

落とすって、気持ちのことだよな？

あれ……？あれれ？

やつ……！落とすって……、ええ！？

「……何かあったのか」

「……何かあったんだな」

「な、何もないから！」

なぜさつきまで気付かなかったのだろうか？

よくよく考えてみれば（よく考えなくても？）、相当なことを言われている。

いや、もっとよく考えてみよう。

あの人にとっては恋愛なんかゲームにすぎないんだ。

だから深く受け止めなくていいと思う。

そうだ、絶対そうだ。

ラミナス様にとってはゲーム。

私はゲームの道具だ。

…… ああ、最悪だ。

最悪だ、あんなエセ皇子！

「……今度は怒り出したぞ」

「……大丈夫なのか？」

「大丈夫！何も無いし、今後何も無いから！」

「……」

ああ、イライラする！

誰があんな皇子に落とされてやるもんかつ。

早くお役御免にならないかな、と心の中で何度となく唱えながら、私はラミナス様の職務室で紅茶を淹れている。

あれ以来ラミナス様は職務室での紅茶を気に入ったのか、毎日頼むようになった。

「今日はアプリコットだね。アリスが俺のために淹れてくれたのか」

「仕事ですから」という言葉を飲み込んで、「はあ」と気のない返答をしておいた。

何が面白かったのか、ラミナス様はくつと喉を震わせながら笑った。いちいち可笑しい言い回しを侍女なんかにして、この人は疲れないんだろうか……。

「アリスは毎日違う紅茶を淹れてくれるが、俺は最近もつと飲みたいモノがあるんだ。なんだかわかる？」

カップに口をつけ、その口でこんなことを言う。

主のニーズを満たすことが侍女の役目ではあるが、いかんせん、この主とは極力関わりたくない。

それ故に興味も湧かない……、というより、これ以上知りたくない。興味が湧いてしまつては、私の負けの決定だ。

「……さあ、なんででしょうか。見当もつきません」

すると、ラミナス様はまたクスクスと笑った。

本当に綺麗だと思う。

思わず見とれてしまいそうだと思ったので、慌てて手元に視線を落とし、ポットを無駄にいじった。

「アリスの血」

「……………は？」

「意中の女性の血は、そりやもう大変に美味らしいからね。至福の一時を得ることもできるって言うし。だから、ね？」

意味を理解できぬまま私は固まり、ラミナス様はやはり面白そうに笑った。

理解した途端、真っ赤になるところか真っ青になった。

何言ってるんだ、この皇子様は？

意中の女性、大変に美味、至福の一時？

今のこの状況から最もかけ離れている単語たちである。私は倒れる前に、たっぷり、たっぷり時間をかけて、

「紅茶を淹れ直してまいります」

とだけ口に出して、猛ダッシュでラミナス様の職務室を飛び出した。下手な言い訳をしたと気付いたのは、少し落ち着いてからだった。紅茶のポットやカップが乗ったワゴンを、そっくりそのまま職務室に置いてきぼりにしてしまっていたのだ。

しかも直前まで手に持っていたポットを、ご丁寧にワゴンの上に戻した状態で。

5・やはり皇子様はヴァンパイアでした（後書き）

双子の兄登場です。

名前が紛らわしくてすみません。

そしてなんだか、甘い感じにもなりません。

いやいや、それはこれからなので……。

駄文とは重々承知しておりますが、どうぞ今後も宜しくお願い致します。

お読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7660x/>

ヴァンパイア皇子の侍女

2011年11月12日11時40分発行